

● 第6回一橋大学政策フォーラム  
「人文学・社会科学の社会的インパクトとは何か？」  
—— 「学問の尊厳」と  
「学問の CIVIC TURN」 ——

2019年2月3日

一橋大学・加藤泰史



# 1: 映画の中の学者/学問 ——『ゴジラ』から『シン・ゴジラ』へ——

1・1: 『ゴジラ』(1954年)の中の学者/学問

1・2: 山根恭平博士(志村喬) 古生物学者・(おそらく)日本生物学会会長で東大教授であり、ゴジラ対策の中心的存在であってその学識に関して尊敬され、その見解も尊重されている。

1・3: 芹沢大助博士(平田昭彦) 山根博士の愛弟子であり、山根博士の娘の元婚約者でもある。(おそらく)戦争中の空襲か何かによって失明などの負傷をして婚約を解消するとともに、大学/学会の表舞台からは一歩退いて自宅で研究を継続する。オキシジェン・デストロイヤーを開発してゴジラを退治すると同時に、その危険性の故に自死する良心的学者。



ニッポン対ゴジラ。

シン・ゴジラ

JULY 29, 2016

1・4:『シン・ゴジラ』(2016年)の中の学問/学者

1・5:「巨大不明生物の学術的正体等に関する緊急有識者会議」 ①志賀(仮名)古生物学者、  
②柳(仮名)海洋生物学者、③埴(仮名)生物学教授 緊急事態にとって無意味で有効性の無い  
発言や誤った予測を行うばかりで、「御用学者」呼ばわりされる。

1・6:霞が関のはぐれ者・一匹狼・変わり者・オタク・問題児などと学会の異端児 ①尾藤ヒロミ  
(市川実日子) 環境省自然環境局野生生物課長補佐、②安田 文科省研究振興局基礎研究振  
興課長、③間 国立城北大大学院(東京大学?)生物圏科学研究科准教授など➡「ヤシオリ  
作戦」の立案

1・8:『ゴジラ』から『シン・ゴジラ』に至る歴史的過程で学問/学者の社会的地位は低下したものとして戯画的に表象されている。

1・9:ただし、両義的でもあり、戯画化されているのは学問/学者の正統派の方である。

1・10:とは言え、学問/学者の制度的危機が表現されていることに変わりはない。

1・11:近年の世界における日本の学問ランキングの急激な下降

1・12:しかしなぜ、戯画化されるほどの危機が生じたのか？

## 2: 朝永振一郎の分析

### 科学者の自由な楽園

朝永振一郎 著

江沢 洋 編



京都に転校し「よくメソメソ泣いていた」病気がちの少年時代。大学は出たけれど、疲労困憊し劣等感にとりつか

かれていたころ出会う生涯の恩師。自身、決して平坦ではなかったという、その道程が、感性の豊かな、思いやりの深い、ひとりの物理学者を生むことになった。ここに収められた随筆、講演、紀行文の随所に、その温かな眼差しが感じられる。



緑 152・2  
岩波文庫

## 2・1: 朝永振一郎『科学者の自由な楽園』(岩波文庫、259頁以下)

「ところで、ご無理をお願いした日本の素粒子論研究の話になるが、ぜんだっての国際理論物理学会議のお客さんたちが日本に来てみて驚き感心したのは、日本の多勢の若い学者たちの熱情的ともいべき研究意欲であった。理論物理学などをやったのでは楽な生活をしてゆけないことは判りきっているにもかかわらず、こんなにも多くの若い人々が文字通りそれに身を打込んでいく、このような気風が、どうしたら起ってくるかその秘密を知りたいともらした人も少なくなかった。あるとき、イギリスのパイエルズさんに「日本の科学教育につき何か気がついた点や注目することがあるか」と聞いたら、その答は「どうしたら日本のように、こういう気風がつかれるか、その教育法を逆に教えてほしい」ということであつた。正直なところ、たいていの国では理論物理学者の不足をかこっているらしい。



こういう気風は、学校で教えようとしても教えられるものではない。日本という国も、どうも自分の国ながらあまり感心したものと思えないが、こういう気風が若い人々の間にあるという点は確かに注目に値することだ。これは大切な「国の宝」として失わないようにしなければならない。こういうものは学校で一朝一夕に教えられないものだけに、いったん失われたら回復は大変である。しかも、失われるのは至極やさしく、作り上げるにはひどく時間がかかる。

このことは、ドイツの歴史が実証している。今から二十年ぐらい前までは、世界の物理学の中心はドイツにあった。そのころ、ドイツの物理学はケンランたるもので、若いすぐれた学者が雲のようにあらわれた。それが急に衰えてしまったのは、一つはユダヤ系学者の亡命にもよるが、それだけが原因では決してない。

それは、基礎科学を軽視する気風がナチスの誤った政策によって国全体にひろがったからである。そうでなかったなら、失われた学者の補充がつかないはずはなかった。国全体の風潮がそうなると、気分的にも経済的にも、研究をつづける若者が出なくなるのは当然のことである。

幸いにして、日本はまだそこまで行っていないようである。しかし、楽観していいか、どうか。若い人たちは、ほとんど九〇パーセントまで何らかのアルバイトなしに研究生活が続けられない有様である。研究の意欲は盛んでも、経済的な裏づけがなくては、十分な成績があがらない。かりに成績はそう気にしないとしても、最もおそるべきことは、やがて意欲それ自身が失われることである。やがて後をつぐ若者がなくなることである」。

\* 朝永は1937~39年にドイツ・ライプツヒ大学に留学した。

2・2: 1960年代末の学生運動以来徐々に日本に蔓延したのは、「基礎科学(=基礎研究)を軽視する気風」ではなかったか。

2・3: 「基礎科学(=基礎研究)を軽視する気風」が学問/学者の制度的危機を招来して、朝永の言う、日本の「国の宝」が社会的に失われた➡大学院生の質の大幅低下

# 3: キーコンセプトとしての「イノベーション」 ——「第5期科学技術基本計画」(2016~20年)と 「HORIZON 2020」(2014~20年)——

3・1: 「基礎科学(=基礎研究=虚学/REINE WISSENSCHAFT)を軽視する気風」⇒「実学(BROTWISSENSCHAFT)を重視する気風」

3・2: 日本とEUの学術政策のキーコンセプトとしての「イノベーション」

3・3: 「第5期基本計画」の切り詰められた「科学技術イノベーション」(経済的価値創出との強固な結合) \* 文科省「コラムNO.7 イノベーションとは何か」

3・4: 社会的課題を工学的に解決できるという工学的発想が前景化した⇒人文学・社会科学の危機

\* ただし、「第3期」「第4期」に含意されていた問いに人文学・社会科学の側が応答しなかったという問題も指摘できる。

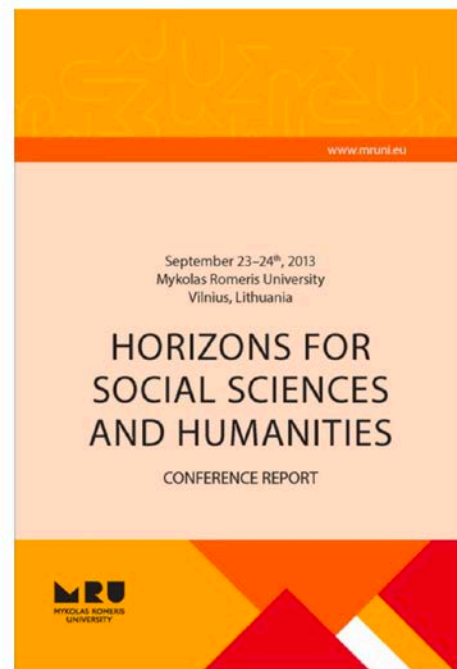
3・5:「ヴィリニユス会議」と「ヴィリニユス宣言」(2013年)

3・6:「ヴィリニユス会議」の目的⇒「HORIZON 2020」のプログラムの中から人文学・社会科学の居場所がなくなる懸念を払拭するとともに、さらにそれ以上にこのプログラムの中に人文学・社会科学を積極的に活かす条件を探り当てようとする

**HORIZONS FOR SOCIAL SCIENCES AND HUMANITIES**

Edited by Katja Mayer, Thomas König,  
Helga Nowotny  
Copy editor Nomeda Gudeliienė  
Designed by Romanas Tumėnas  
Mykolas Romeris University Publishing, 2013

ISBN 978-9955-19-624-2 (Online)  
ISBN 978-9955-19-625-9 (Print)



## 3・7:「ヴァリニユス宣言」

「ヴァリニユス宣言」(抄訳)

人文社会科学(SSH)のための地平／展望

2013年9月24日

ミーコラス・ロメリス大学／ヴァリニユス／リトアニア

ヨーロッパは、学問研究とイノベーションへの賢明な投資から利益を獲得するだろうし、人文社会科学はそれに寄与する準備ができています。ヨーロッパ社会は、学問研究とイノベーションが成長の基礎であると期待しています。HORIZON 2020は、学際性と統合された学問的アプローチを実行することを目論んでいます。学問研究が社会に貢献するべきならば、関係のあるすべての当事者の弾力的なパートナーシップが必要とされる。パースペクティブの多様性がイノベーションの利益を獲得するのに役立つ。人文社会科学を[HORIZON 2020に]効果的に統合するためには、人文社会科学がそれ自身のために価値評価され研究されたりすると同時に、他の学際的なアプローチとの協力関係の中で価値評価され研究され享受されることも必要である。

## 人文社会科学を〔HORIZON 2020に〕統合することの価値と利益

ヨーロッパの人文社会科学は、世界水準であり、特にその多様性を尊重している。人文社会科学は、われわれの社会を転換する人間らしい価値・アイデンティティ・シティズンシップにおけるダイナミックな変化に関する知識を生み出す際になくてはならない。人文社会科学は、民主主義がよりよくまた持続的に機能するための実践的解決の学問研究・デザイン・転移に従事している。人文社会科学をHORIZON 2020に統合することは、社会が機能する仕方が現在進行形で変化することに合わせて学問を再編成しつつ、イノベーションについてのわれわれの理解を広げる機会を提供する。

- 1 イノベーションはテクノロジーにおいてはもとより組織や制度における変化の問題である。
- 2 社会の反省能力を高めることは活発なデモクラシーを持続させるために決定的に重要である。
- 3 政策立案と研究政策は、SSHの知識と方法論から多くの恩恵を受けている。
- 4 ヨーロッパのもっとも貴重な文化遺産を活用する。
- 5 人文社会科学が本当に統合されうるならば、人文社会科学の多元主義的思考はヨーロッパのすべての将来の学問研究とイノベーションにとって貴重な資源である。HORIZON 2020はその最初の機会を与えるだろう。



## 人文学・社会科学を適切にHORIZON 2020に統合するための条件

- 6 知識の多様性を承認する。
- 7 効果的に共同学問研究する。
- 8 学際的な訓練ならびに学問研究の促進。
- 9 社会的価値と学問研究の評価とを結びつける。

ブリュッセル宣言の原理への同意は人文学・社会科学をHORIZON 2020に統合するための基礎とされるべきである。

### 3・8:「ヴァリニユス宣言」の意義

3・8・1:「イノベーション」を前提として受け入れた上で、さらに科学技術の進歩が直ちに社会変革を意味するわけではないとの洞察を通して「ヴァリニユス宣言」は、社会変革自体が人文学・社会科学の知見を必要とするがゆえに、人文学・社会科学こそが科学技術と社会を有機的に結び付けるために不可欠のツールであることを再確認するように促したが、それは社会を「イノベーション」の切り詰められた論理でのみ染め上げるのを阻止すると同時に、かえって「イノベーション」を人文学・社会科学の論理でもって豊かに捉え返すことを可能にする。

3・8・2: 大学の構成を自然科学・工学に偏ることなく、人文学・社会科学にも対等にその余地を確保し、特に人文学を決して排除したり取りこぼしたりしないことによって、学際的研究を真剣に推進することが可能になる。

3・8・3: 人文学・社会科学が学際的研究の先頭に立つことにより、自然科学・工学とばかりでなく、市民との関係も捉え返しが可能となる⇒先端科学技術・先端医療技術の社会的受容(拒否)を媒介する学問として人文学・社会科学を再編成する可能性⇒「学問のCIVIC TURN」(カントがそうした議論をすでに提供している⇒ベルリン大学の設立へ)

\* 学際的研究の場合に「人文学・社会科学」からの参加者と自然科学系の参加者を同数にするなどの工夫

## 4：第6回政策フォーラムの問い

4・1：人文学・社会科学の「社会的インパクト」を問い直すことを通して、人文学・社会科学の新たな可能性をどのように掘り下げてゆくことができるのか➡社会の民主主義化・多元主義化との関係➡ゲノム編集の問題など

4・2：水村美苗『日本語が亡びるとき』（ちくま文庫）の問題提起（学術言語としての日本語など）をどう受け止めるのか？

4・3：「翻訳」の問題をどのように捉え直すことができるのか？



VIELEN DANK FÜR IHRE AUFMERKSAMKEIT!

ご静聴ありがとうございました！